

## Ernest Hemingway: *The Killers*

——短篇小説の技巧——

神 崎 浩

Summit という町にある簡易食堂に、黒いダービー・ハットに黒いオーバーを着た二人の男が入って来て、夕食を注文する。ウェイターの George がディナーは6時にならないと出来ないと言うと、サンドイッチを注文して、手袋をはめたまま食べてしまう。それから二人は、店に来ていた Nick と、料理人の Sam を縛り上げて調理場に入れ、George には客が来ても料理人が休みだと言って断るように命令する。この二人の男は Al と Max という殺し屋で、友達に頼まれて Ole Andreson というスウェーデン人を殺しに来たのだ。Ole はいつもこの食堂には6時に来る。ところが、この日に限って6時を過ぎても彼は来ない。殺し屋たちは7時頃まで待つが、遂に何もしないで引き上げてしまう。Nick は Ole にこのことを知らせようとして、彼の下宿へ行く。ところが Ole はもう逃げることにすっかり疲れてしまっていて、殺し屋に殺されるのを、ただ無気力に待っているだけである。Nick はそのような不条理が行なわれるのを黙って見ていられなくなり、その町を出て行く決心をする。

以上が Hemingway の1927年に出版した短篇集 *Men Without Women* に収められている “The Killers” の梗概である。

現在では Hemingway の短篇のうち、最も高い評価を受けているこの作品も、最初からそのような評価を受けていたとは到底考えられない。ちなみに “The Killers” が単独で批評の対象として取り上げられ、分析されたのは、Cleanth Brooks と Robert Penn Warren によるものが最

初で、1942年春、*American Prefaces VIII* に載せられ、後に *Understanding Fiction* (1943年) に収められている。

日本でこの短篇が翻訳されたのは、大久保康雄訳「ヘミングウェイ短篇集」新潮文庫 (1954年)、竜口直太郎訳「殺人者と狩猟者 他一篇」角川文庫 (1954年)、西川正身、滝川元男訳「ヘミングウェイ全集 第一巻」三笠書房 (1955年) などに見ることが出来るが、これらの訳はどれを取り上げて「殺人者」として訳してある。“The Killers” は「プロの殺し屋」のことであって、決して “murderer” ではない。これを「殺人者」と訳したのでは、まるで殺人犯人の登場するスリラーか推理小説でもあるかのような錯覚を与えてしまうことになる。ここはやはり、「殺し屋」か「殺人業者」<sup>(1)</sup> でないと、作品の内容を伝える象徴的役割りとしてのタイトルの意味が無くなってしまう。

我が国におけるヘミングウェイ研究の草分けとも言うべき高村勝治著「ヘミングウェイ」研究社 (1955年) でも、“The Killers” を「殺人者」として紹介している。ただし、

この短篇は「殺人者」という題ではあるが、殺人者をえがいたものではない。まして、殺人という事件をえがいたものではない。殺人者はただ人に頼まれただけで人を殺そうというのであり、彼らはヴァイオレンス (暴力) の横行する混乱した世界の象徴なのである。そして、オールはそうした世界にあって、絶望して、死を待っているのである。そう考えると、力点はオールにかかってくる。この物語は一人の男の絶望を物語ったものだ。<sup>(2)</sup>

として、この「殺人者」とは「殺人請け負い業者」としての「プロの殺し屋」のことであると、説明している。しかし、Hemingway が果してここで描きたかったものは、絶望し切った一人の男 Ole を中心にした物語だ

ったのだらうか。

そこで、この作品は誰が中心人物であるかに焦点を絞って分析をしてみよう。

物語は Outside it was getting dark. The street-light come on outside the window. (p. 1, l. 8~9)<sup>(3)</sup> ‘It’s five o’clock.’ (p. 1, l. 21) というところから、午後5時であり外は暗くなりかけているときで、季節は冬だということがわかる。さらに、At six-fifty-five George said: ‘He’s not coming.’ (p. 8, l. 4) Max watched the mirror and the clock. The hands of the clock marked seven o’clock, and then five minutes past seven. (p. 8, l. 23~25) ‘Better give him five more minutes,’ Al said from the kitchen. (p. 8, l. 28~29) の個処によって、二人の男が食堂に入ってから2時間10分経過していることが読者にわかり、殺し屋たちが去った後で Nick が Ole Andreson の下宿へ行って、殺し屋に狙われていることを忠告して帰って来るまでに、約1時間かかったとしても、この物語は約3時間の間に起った出来事を描いたものだということになる。

さて、その約3時間の間に登場する人物だが、まずウェイターの George. 次いで Al と Max の二人の殺し屋、そして店に来ていた Nick, コックの Sam が主要な登場人物である。そして、Nick と Sam を殺し屋たちが縛って調理場へ入れた後に客が4人来る。殺し屋が去ってから Nick が様子を見に行く Ole Andreson と、下宿屋の管理人の Mrs. Bell が物語の終り近くになって出て来る。以上のように、この作品には都合11名が登場するのだが、この中から客の4人と Mrs. Bell. それにコックの Sam は中心人物としての役割から除外できることは明白である。

そこで、まず殺し屋たちがどのように描かれているか、という点に注目してみよう。

冒頭のシーンで Henry’s lunch-room に入ってきた二人連れが、

George に 'What's yours?' と尋ねられて、'I don't know' と答えるところから、この二人は食事が目的でこの店に入って来たのではないことが理解できる。最初の男が 'I'll have a roast pork tenderloin with apple sauce and mashed potatoes,' (p. 1, l. 13~14) と言っているのは、多分メニューに書かれている一番最初の料理をその通りに読み上げているだけなのだ。だから、George が 'I can give you any kind of sandwiches.' (p. 1, l. 27) と言うのも聞かず、'Give me chicken croquettes with green peas and cream sauce and mashed potatoes.' (p. 2, l. 3~4) と言うのも、二番目に書かれているメニューなのだろう。そして、'I can give you ham and eggs, bacon and eggs, liver —' (p. 2, l. 9~10) と言いかけるのを全部聞かないうちに、'I'll take ham and eggs.' と Al が言い、'Give me bacon and eggs.' と Max が注文するのも、George が言った順に注文しただけのことで、この二人は食べ物にはほとんど無関心であることがわかる。

この二人の男はダービー・ハットを被り、黒のダブルのオーバーをボタンをきちんと留めて着ている。シルクのマフラーをつけて、手袋をはめている二人は顔こそ違っているが、まるで双児のように服を着込んでいた。勿論、彼等のオーバーの下にはショット・ガンが隠されているのだ。

二人はサンドウィッチを手袋をはめたまま食べた。(p. 3, l. 20~21) 指紋を残さないようにというプロ意識からであることは言うまでもないことである。食事が終ると、Max は Nick に 'You go around on the other side of the counter with your boy friend.' (p. 4, l. 4~6) と命令する。そして、'Who's out in the kitchen?' 'The nigger.' 'What do you mean the nigger?' 'The nigger that cooks.' 'Tell him to come in.' (p. 4, l. 12~17) と言って調理場からコックの Sam を呼び出して、この店にいる全員を確かめてから、Nick と Sam を調理場へ入れて縛り上げてしまう。

Al は調理場に入るとそこから店に料理を差し出す小窓を開けて、  
 ‘Stand a little farther along the bar.’ と店に残っている George に  
 命じ、更に ‘You move a little to the left, Max.’ と相棒の Max に  
 対しても位置を指定する。これは調理場から入口が良く見えるようにする  
 ためである。一方、The man called Max sat at the counter opposite  
 George. He didn’t look at George but looked in the mirror that  
 ran along back of the counter. (p. 5, l. 11~14) という具合に、Max  
 もやはり入口を鏡に写して、誰が入って来てもすぐわかるように気をくば  
 っている。

これだけの準備が出来たところで、Max は George に ‘We’re going  
 to kill a Swede. Do you know a big Swede named Ole Andre-  
 son?’ (p. 6, l. 9~11) と自分たちの目的を教える。彼等は Ole が6時  
 になると、毎晩この店に食事に来ることを調べて知っているのである。彼等  
 は Ole には会ったこともない。‘He never had a chance to do any-  
 thing to us. He never even seen us.’ ‘And he’s only going to  
 see us once.’ (p. 6, l. 24~26) つまり Ole が彼等と会った時は、彼が死  
 ぬ時なのだ。

‘What are you going to kill him for, then?’ と George が尋ね  
 ると、‘We’re killing him for a friend. Just to oblige a friend,  
 bright boy.’ (p. 6, l. 30~31) という答が返って来る。

結局、7時10分まで待っても Ole Andreson は来なかったので、二人  
 の殺し屋たちは引き上げて行ってしまふ。

‘I don’t like it,’ said Al. ‘It’s sloppy. You talk too much.’ .....  
 He came out from the kitchen. The cut off barrels of the shot-  
 gun made a slight bulge under the waist of his too tight-fitting  
 overcoat .....

The two of them went out the door. George watched them,

through the window, pass under the arc-light and cross the street. In their tight overcoats and derby hats they looked like a vaudeville team. (p. 9, l. 8~25)

物語の約3分の2までは、Al と Max に George が相手をする場面が続き、あたかもこの物語は、プロの殺し屋の手慣れた用意周到な動きを描くことを目的としているかのようである。

ここまでは殺し屋を中心とした物語が展開するので、この作品はスリラー小説として評価すべきではないのか、という懸念さえ起って来る。そして、さらにその緊張感を盛り上げるための技巧として、故意に20分進んだ時計を小道具として用いている。

Ole Andreson が店に6時になると食事に来るという事実は、Max に言われなくても George は十分に知っている。その6時に Ole が来れば、それが彼の最後となるのである。George が時計を見る毎に Ole の店に来る時間が間近なことを知り、時計が20分進んでいることに気付いて安堵する。

George looked up at the clock. It was a quarter past six. The door from the street opened. A streetcar motorman came in. (p. 7, l. 21~23) この時の正確な時間は5時55分である。運転手が出て行き、George looked at the clock. It was twenty minutes past six. (p. 7, l. 28~29) いまが丁度6時なのだ。6時55分、本当は6時35分までに二人の客が来て、7時10分、実は6時50分にまた男が一人入って来る。そして殺し屋たちが引き上げるところで、緊張感はクライマックスに達するのだが、スリラーとしての展開はここまでであり、以後は Nick を中心とした、George と Sam の会話となる。

それでは次に、Nick がこの物語の中で何を見ていたのか、何を聞いたのか、そして何を知ったのかという点を観察することにしよう。

この物語の最初から分ののところまでは、二人の殺し屋と George が

表面に出ていて、Nick の姿はほとんど読者には見えない所に置かれている。Nick がそこにいたことを解らせる個所は、冒頭のシーンで殺し屋たちが店に入って来た時、From the other end of the counter Nick Adams watched them. He had been talking to George when they came in. (p. 1, l. 10~12) という場面と、Al が 'What's your name?' と聞いたのに対して、'Adams.' (p. 3, l. 8) と答えるところと、そして、Max が「カウンターの後に回れ」と言うのに対して、'What's the idea?' (p. 4, l. 7) と言い返しはしたが、結局はカウンターの後へ回って行き、コックの Sam と一緒に調理場へ行って、Al に 'The nigger and my bright boy are amused by themselves. I got them tied up like a couple of girl friends in the convent.' (p. 7, l. 4~7) と言わせている場面だけである。

しかし、Nick は物語の中には登場して来ないが、事の成り行きを見ていたのである。彼は殺し屋たちと話をしている George とは別な視点を持って観察していたのである。From the other end of the counter Nick Adams watched them. がそのことを明確に物語っている。

だから、二人の男が店に入って来て適当に注文し、George を相手にかわした会話も全部聞いているし、Sam と一緒に縛られて口にタオルを噛まされて調理場に置かれた時も、Al と Max が大声で話し合い、Ole Andreson を殺すための手筈を整えている様子も逐次理解していたのである。

表面的には George と殺し屋たちとの会話でストーリーを進行させながら、実は Nick がそれを的確に判断していたことは、殺し屋たちが店を去った後に、縄を解かれ恐怖心が去ると、Ole Andreson に殺し屋が来たことを知らせるため、彼の下宿へ行く個処で、理解出来る。そして、これ以後は Nick が表面に出て、物語の中心となって結末へと進んで行くのである。

Ole の部屋へ入ると、元へヴィーウエイトのボクサーだった彼は、服を着たままベッドに横になっていた。殺し屋たちが狙っていることを告げて、Ole は何んの反応を示さない。‘They were going to shoot you when you came in to supper.’ Ole Andreson looked at the wall and did not say anything. (p. 11, l. 27~30) ‘I tell you what they were like.’ ‘I don’t want to know what they were like,’ Ole Andreson said. He looked at the wall. (p. 12, l. 3~6)

Nick は一人の男を自分の忠告から救うことが出来るのではないかという期待を抱いて、Ole の下宿へ向って行ったはずである。

Outside the arc-light shone through the bare branches of a tree. Nick walked up the street beside the car-tracks and turned at the next arc-light down a side-street. (p. 10, l. 29~32)

このアーク燈の光る路を歩く Nick の姿は、そのまま彼の期待感であり、男を一人救うという誇りに満ちた姿でもある。ところが Ole の部屋で見たものは、絶望感に打ちひしがれて、壁を見つめたまま逃げようもしない男の姿だったのだ。

多くの評論で指適されているように、Ole が見つめていた「壁」は「絶望」を象徴するものであることは言うまでもないことである。だが、彼の部屋が、Nick followed the woman up a flight of stairs and back to the end of the corridor. (p. 11, l. 7~8) に見られるように、廊下の突き当りの部屋だということも、同様に「逃げ場を失った」男の心状を表わしているのである。

Nick は自分の好意が無駄になったことに失望して下宿を出た。

Nick walked up the dark street to the corner under the arc-light, and then along the car-tracks to Henry’s eating-hause. (p. 13, l. 22~24)

明るいアーク燈の光りに照された路を歩いて Ole の下宿へ向った Nick



が、同じ路を帰って来る時の描写では、暗い通りを歩いてアーケ灯のある角まで行き、という表現になっている。これは Ole の下宿での体験が、彼の心状を大きく変化させたことを意味している。

George たちの待つ店へ帰って来た Nick は、Ole がもう逃げる気力を失なっていることを話して、‘I’m going to get out of this town,’ Nick said. ‘Yes,’ said George. ‘That’s a good thing to do.’ ‘I can’t stand to think about him waiting in the room and knowing he’s going to get it. It’s too damned awful.’ ‘Well,’ said George, ‘You better not think about it.’ (p. 14, l. 18~23) と町を出る決心を語るのである。

Nick は物語が始まった時点でカウンターの端に腰を下して George と話をしていた時の、あの Nick と、町の出る決心をした結末部の彼とは明らかに違った人物になっている。

つまり、この物語は、あの *Indian Camp* で Nick が人間の誕生と死に対して何かを学び、理解したのと同様に、社会悪に対する恐怖と、一人の人間の力ではどうすることも出来ない大きな組織の存在に対する無力感を理解した Nick の物語なのである。決して、殺し屋をテーマにしたスリラーでもなければ、一人の元ボクサーの絶望の物語ではない。世の中の悪に対する Nick の開眼の物語なのである。

使用テキスト Ernest Hemingway: *The Killers & Other Stories*  
南雲堂 1960年

#### 注

- (1) 佐伯彰一著「現代小説の問題点」南雲堂、1961、p. 196 に“*The Killers*”をこのように訳してある。なお、研究社の「20世紀英米文学案内」第15巻「ヘミングウェイ」、1966年、では佐伯氏は「殺し屋」の訳語を用いている。
- (2) 高村勝治著「ヘミングウェイ」、研究社、1955年、p. 85
- (3) ページ及び行はテキストのものである。以下同様。